

亜高山帯における育成天然林の施業について～過去と現在を比較～

日高北部森林管理署 一般職員 内田 貴士

背景・目的

・厳しい気象条件下の亜高山帯の育成天然林において、どのような施業方法が適しているか、昭和41年から各種更新方法により実施され、これまで5回の研究発表が行われてきました。現在の状況を確認し、過去の研究結果と比較する中で、今後の施業をどのようにするのか考察します。

各種更新方法

1条植え



巢植え



伐根周囲植え



調査箇所

調査結果

- 調査方法 ・毎木調査(胸高直径・樹高)
- ・樹冠投影(樹冠縦横の長さ・樹木位置)

○H27年 1条植え

造林木の材積 110.16m³/ha 本数 700本/ha

天然木の材積 148.66m³/ha 本数 100本/ha

○H27年 巢植え

造林木の材積 47.83m³/ha 本数 517本/ha

天然木の材積 368.83m³/ha 本数 216本/ha

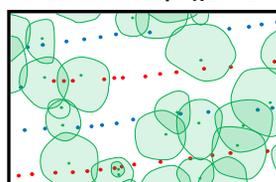
調査結果により共通していることは、別々な更新方法でも、うっ閉度は28年経過してもあまり変化していません。そして、一部造林木と下層木が天然木により被圧され、消滅または生長していない状況にありました。

樹冠投影図

うっ閉度

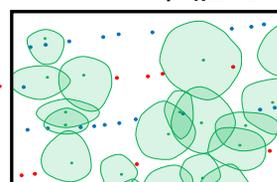
●	トドマツ
●	アカエゾマツ
○	樹冠

S62 1条植え



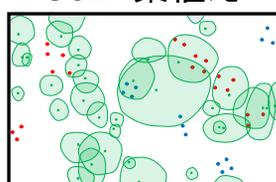
60%

H27 1条植え



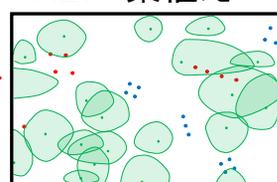
55%

S62 巢植え



48%

H27 巢植え



45%

今後の施業・考察

・天然林受光伐を検討しています。被圧されている造林木と下層木を生長させるため、胸高直径30cm以上のトドマツ・アカエゾマツ、ダケカンバなどと、併せて、造林木と下層木の生長を阻害する形質の不良な広葉樹も伐採します。特に、注意する点は亜高山帯の厳しい気象条件下であることから伐採を過度に行くと被害に遭うことが考えられるので、**過度に伐採しないことが必要**です。今後は、同様の環境に置かれている育成天然林についても同様の施業をしたいと考えています。